〈経営研究　第11巻　第3号　平成10年2月〉

アメリカ・インディアン高校生の中途退学問題について〔中－続〕

伊　藤　　聰

目　　次

はじめに
I　インディアン教育の歴史
II　インディアン高校生の中途退学者に関する研究論文
［本項(4)まで第10巻第3号，(5)および(6)第11巻第1号，(7)～(12)本号］
III　研究論文総括(1) ―― インディアン高校生の中途退学率について
IV　研究論文総括(2) ―― インディアン高校生の中途退学をめぐる諸要因について
おわりに

(7) Elizabeth A. Brandt, "The Navaho Area Student Dropout Study: Findings and Implications", Vol.31, No2,1992.

［研究目的］

1，ナヴァホ居留地およびその近隣地域におけるナヴァホ学生の退学問題の範囲と特徴に関する情報を提供すること。

2，ナヴァホ学生の退学の主な理由を明らかにすること，およびそれぞれの理由ごとの退学者数を測定すること。

3，退学者および潜在的退学者のニーズや状況を効果的に導き出すために勧告を行なうこと。

［調査方法］

1，多数のナヴァホ学生を管轄する3州（アリゾナ，ニュー・メキシコ，ユタ）の教育局および主たる教育事務所から，学生の退学，出席状況，州統一テスト，入学および卒業資格に関する全てのデータを収集し，検討した。

2，居留地内およびその周辺地域の259校に対し，「学校特性調査」アンケートを送付し，118校より回答を得た。これらの学校は管理者別に，インディアン局契約校，教会関係，インディアン局，公立の4つに分けられた。

3，上記の学校の学生にアンケートが実施された。また，校長と教職員に対してインタビューが行なわれた。

4，これらの学校から滞学者(1)と退学者それぞれ1,000人が無作為に抽出され，インタビューを受け，そしてアンケートに答えた。回答率は66.8％であり，最終サンプル数は滞学者670，退学者219であった。

インタビューを実施して行く中で，学校が退学者と認定していた学生の50％以上が，実際は他校に転学していたか，卒業していたことが判明した。このため，別の学校の退学者を追加した。最終のサンプル数については記述がない。

［調査結果 ― 退学率など］

1，平均退学率は約31％であった。

2，ナヴァホ学生の退学はあらゆるレベルで見られる。

3，12年生が最も高い退学率を示している。一部の学校では，12年生の退

学率は50%であった。

4，8年生が高い退学率を示していた。これは，居留地内および近隣に高校がほとんど存在しないことと関係があると考えられる。

5，全退学者の46%が，復学し，卒業したいと思っていた。
また，45.1%が復学するかもしれないと語っていた。
そして，8.8%は復学を望んでいなかった。

6，「浮動」[2]という現象が見られた。これは，居心地が良く，我慢でき，やる気がでてくる学校が見つかるまで，転学を繰り返すことである。

7，滞学者[3]は，退学者より多い割合で2度以上転学していた。

8，退学や転学は，より良い教育環境を見つけるための試みである。

9，他の学生より長期間かかろうとも，学生の教育に対する欲求は高い。

10，学校管理者別の中途退学率は，高い順に次のとうりである。

＊インディアン局立	24.0%	(1984－85)
	28.0%	(1985－86)
＊公立	14.2%	(1984－85)
	20.5%	(1985－86)
＊契約校	11.2%	(1984－85)
	［1985－86については記述なし］	
＊教会関係	7.7%	(1984－85)
	8.5%	(1985－86)

［調査結果 ― ナヴァホ学生の退学理由］

1，学業問題

＊一般的な考えとは異なり，この研究では，ナヴァホ学生が退学を考える場合，学業問題は大きな問題ではないと思われる。

＊学業問題を退学の理由として挙げたのは5.9%である。

2，通学距離と通学手段・長期欠席

＊学校への距離が長く，舗装道路がないために，通学の困難さが長期欠席の主要な要素となると思われる。

＊一般的に，長期欠席は退学と関連があるとされている。この調査では，通学問題が退学行動の一要素であることがわかった。

＊通学手段別の割合は次のとうりである。

通学手段	滞学者（%）	退学者（%）
バス	35.0	60.8
家族による送迎	24.0	24.9
徒歩	24.6	4.1

＊バスに乗り遅れた場合，滞学者の79.8%が徒歩あるいは両親の車で登校するとしているのに対し，退学者は43.8%である。

＊滞学者の両親は退学者の両親より，子供を車で送り，また徒歩通学可能な所に住んでいる傾向が強い。

3，伝統主義，言語，社会経済状況

＊下の表でわかるように，ナヴァホの家庭の生活水準や伝統主義の度合は，退学行動において重要な要素とはならないと思われる。

	滞学者(%)	退学者(%)
電気が引けている	68.1	59.3
羊を飼育している	55.5	54.0
メディシン・マン(4)を利用する	79.5	77.1
冬物語をナヴァホ語で語る	48.8	42.4
家庭でナヴァホの歌を歌う	41.5	47.2

＊5歳以前に英語に慣れていることは，学業継続と大いに関係がある。全滞学者の約50.5％が5歳以前に英語に慣れていた。一方，退学者の場合は26％が入学前に英語に慣れていたに過ぎない。

＊しかし，どちらのグループも同じ割合で自分の英語力を平均あるいはそれ以上であると考えていた。

また，滞学者の78％，退学者の88.6％が自分のナヴァホ語能力を平均あるいはそれ以上と考えていた。

＊滞学者の80％，退学者の90％が，両方の言語を話す能力に十分自信があると考えていた。

4，退学者が指摘する退学理由

学校が退屈	20.5(％)
他の学生との問題	15.5
欠席過多による留年	14.2
妊娠，結婚	9.6
教員との問題	7.8
法的問題（逮捕など）	7.3
麻薬やアルコールの乱用	7.3
家族を助けるため	7.3
規律問題	5.9
学業問題	5.9
他の学生より年配であること	5.5
通学手段が不十分	3.2
言語の問題	1.8
病気	1.8
仕事	1.4
その他	3.7

5，教職員の意見

教育に無関心	24.4(%)
卒業への動機づけがない， 　カリキュラムが学生のニーズに合っていない	18.6
規律問題，出欠政策，通学距離	16.3
家族の引越し，季節的な仕事	15.1
両親や家族からの励ましの欠如	38.4
アルコールや麻薬の乱用	7.0
貧困および他の経済的理由	9.3
健康，妊娠	3.5
学業問題	29.1
教職員の援助不足	11.6
家庭問題，家庭内の仕事	25.6

6，学生・両親と教職員の間のギャップ

＊校長をはじめとする教職員は，中途退学の問題は学生とその家庭の問題であるとしている。ナヴァホである校長でさえそうである。

＊滞学者も退学者もともに，退学問題は学生間，学生・教職員間の関係や，学校の環境と大いに関連があると考えている。

＊滞学者も退学者もともに，教育に対する関心は高く，教育の重要性を認識している。

＊滞学者の7.3%と退学者の30.2%が大学進学を想定していないだけである。

＊ナヴァホ地域社会の大部分は，教育に強い関心を抱いている。

＊以上のことから，不登校中の学生ももし適切なプログラムがあるならば，復学するであろうと思われる。

＊滞学者の82%と退学者の56.7%が，両親や親類はつねに学校へ行くよう励ましてくれると語っている。

＊滞学者のわずか2.6％と退学者の7.4％が，両親の励ましはないとしているだけである。

＊滞学者の12.6％と退学者の7.5％が，家族は学校活動に積極的であると答えている。

＊滞学者の15.1％と退学者の24.8％が，家族は学校活動に決して参加しないと答えている。

＊どちらのグループも約41％が，家族が学校ともっとコミュニケーションを持ってくれたら学校に居やすいとしている。

＊大多数の学校が中途退学防止プログラムを備えていない。

＊教職員のわずか約16％が，学生に対してもっと個別に関心を示すこと，両親と教員の関係をより良くすることの必要性を指摘しているだけである。

＊教職員には，カリキュラム改革，教職員の資質や現場教育の改善，学校環境改善に対する関心が全くない。

＊教職員は退学の原因を学生やその両親に求めているので，彼等の退学防止のための提案は，両親と接触したり，出席に関して両親や学生に懲罰的行為を与えることなどに限定されてしまう。

＊教職員インタビューのデータは，学内における組織化された差別とナヴァホ学生の能力の低評価が行き渡っていることを示している。

［確証された仮説］

1，長期欠席と退学の間には肯定的な関係がある。

2，英語の習得年齢と学業継続の間には肯定的な関係がある。

3，通学距離は学業継続に影響する。

4，転学の回数が多いほど学業継続の度合が高い。

5，問題行動は退学と関係がある。

6，アルコールや麻薬の乱用は退学と関係がある。

7，伝統的な価値観や考え方は学業継続と肯定的な関係がある。

8，１日２時間以上の通学距離は退学と関係がある。

9，家に電気が引けている学生は学業継続する度合が高い。

10，両親の励ましがある学生は学業継続する度合が高い。

11，ナヴァホ語と英語の両方に堪能なことは学業継続と関係がある。

12，小規模校は大規模校より退学率が低い。

13，１回以上退学した経験のある学生は再び退学する度合が高い。

Brandt の調査研究はナヴァホ族に限定されたものであるが，比較的緻密な優れた研究であるといえる。多くの学生や教職員が対象とされ，時には密着調査が行なわれている。退学理由に関する学生と教職員の意見の相違については，先の Dehyle よりも分析が深い。

退学を防止するためには，単に学生や家庭を変えるだけでなく，状況全体を変える必要があると結論づけているが，これは妥当であろう。

この調査の限界については，Brandt 自身が次のように述べている。調査期間が短かかったこと，学校の学生記録簿が不完全であったこと，である。この結果，他の調査研究にもいえることであるが，退学率などについて明確な科学的数字が得られなかった。

ナヴァホ族は最大の部族であり，教育にもきわめて大きな関心を示し，教育予算も多い。このことを考えると，この調査研究の結果が他の部族の状況を判断することの役には立たないかもしれない。しかし，教職員の大部分が白人であり，一方，教育を受ける学生の文化や歴史が白人とは全く異なることから生じる大きなギャップが，ここで明確に再確認されたことは意義が大きい。

末尾に学校改善のための提案がなされているが，学生を傷つけるような政策を再考すること，差別を許してはならないことなど，教育ということを考える場合ごく当然のことばかりである。このことは，インディアン教育がひどい状況に置かれていること，特に，教職員の資質や意識がきわめて低いことを示している。

(8) Ardy Bowker, "The American Indian Female Dropout", Vol. 31, No3, May 1992.

[研究目的]

インディアン女性の中，高校を卒業した者の成功の要因，および，退学した者の不成功の要因を調査すること。

[調査方法]

居留地に居住する991名の女性がインタビューを受けた。これらの対象者が学歴によりつぎの３つに分類された。つまり，高校退学者，高校卒業者，および大学学位所持者である。年齢層は17才から36才である。

インタビューの内容は，この種の研究で最もよく使用されるものによりデザインされた。家族の状況に関するものがかなり具体化されている。

[調査結果]

（明確に結果として導き出されたものが少ないように思われる。"some of the women..."とか，"many of them..." などの表現が散見される。ここでは，明確な結果と判断できるものだけを列挙したい。）

1，67％は高校在学中に飲酒の経験がない。

2，退学者の51％が在学中に妊娠している。（全国平均は40％）
　多くは，積極的に十代の母親になりたかったわけではない。
　妊娠は中途退学の理由になるが，子育てに関しては家族は支持する。

3，対象者の全員が，いろいろな問題を抱える居留地に居住しているのであるが，半数以上が卒業している。しかも，地域の重要なメンバーとなっている。

4，これまでの研究では，２人に１人の割合でインディアン学生はアルコールないし麻薬乱用により退学するとされるが，本研究ではこれは事実ではなかった。

5，約17%が，教師は彼女らに無関心であり，時には虐待的であり，また時には人種的差別主義者であった，と語っている。

6.22%が，教師は協力的であったとしている。

7，卒業者には家族の強い支持があった。

991名もの対象者がありながら，なぜ明確な結果が示されなかったのであろうか。インタビューという調査形式の問題であろうか。女子のみを対象とした研究が他にないという貴重さを考えると，このことが残念である。

(9) Susan Ledlow, "Is Cultural Discontinuity an Adequate Explanation for Dropping Out?", Vol.31, No3, May 1992.

（詳細は，拙稿「アボリジニと教育II ―― その教育を阻害する諸要因について ―― 」[5]を参照）

ここでは，Ledlow の主張点だけを指摘しておきたい。それは，次の3点に要約できる。

1，マイノリティ学生の学業不振の原因は，アメリカ社会の構造的不平等性である。

2，「文化的断絶」仮説（インディアン学生の高退学率の主要原因を，カリキュラムがインディアン学生の文化を反映していない点に求めるもの）は，同様に文化的断絶を経験する移民の子弟の教育上の成功を説明できていない。

3，教育の研究や調査は，文化的社会生態学的方法によるべきである。

(10) Jon Reyhner, "American Indians Out of School: A Review of School-Based Causes and Solutions", Vol.31, No3, May 1992.

［研究目的］

これまでの調査研究により指摘されてきた，インディアン学生の退学に関連する諸要素について検討すること。諸要素とは，大規模な学校，無関心で低資質な教員およびカウンセラー，受け身の教授法，不適切なカリキュラム，不適切なテスト，留年，能力別クラス，両親の参加の欠如，の８点である。

［諸要素の検討］

ここでは，これまでに紹介されなかった点についてのみ取り上げる。

1，低資質の教員

＊不十分な教員資格のために，インディアン学生を相手とする資質のある教員が生まれない。

＊教員採用試験は，インディアン学生を教える熱意や，インディアン文化や言語に関する知識を測定できないものである。したがって，インディアン学生が教員への道を進むことも難しい。

＊教員養成や免許状取得プログラムが，中流階級，西洋文化中心的である。

2，不適切なテスト，留年

＊不適切なテストが採用されるために，インディアン学生の真の能力が測定されない。その結果，留年となり，さらには退学に至ることにもなる。

3，能力別クラス

＊教員はインディアン学生に期待せず，職業教育中心のカリキュラムを与えることが多い。

＊マイノリティの学生は，低能力のクラスに入れられ，そこで標準以下の教育を受ける。その結果，彼等の将来は低レベルの職業と社会的地位に限定されることになる。(Oakes　1985)

(11) John S. Backes, "The American Indian High School Dropout Rate: A Matter of Style?", Vol.32, No3,May 1993.

[研究目的]

チペワ族（混血者を含む，以下同じ）高校生の学習スタイルが，学業の成功，不成功に及ぼす影響について調査すること。

[調査方法]

論点は次の５つに絞られた。

1，1992年にタートル・マウンテン・コミュニティ高校（ノース・ダコタ州ベルコート）を卒業したチペワ族の学生の主要な学習スタイルは何か。

2，過去４年間に同校を退学したチペワ族の学生の主要な学習スタイルは何か。

3，1992年にセントラル高校（ミネソタ州クルックストン）を卒業した非インディアン学生の主要な学習スタイルは何か。

4，過去４年間に同校を退学した非インディアン学生の主要な学習スタイルは何か。

5，チペワ族の学生の学習スタイルと非インディアン学生の学習スタイルに重要な差があるか。

学習スタイルは，Concrete Sequential(CS)，Abstract Sequential (AS)，Abstract Random(AR)，Concrete Random(CR)の４つである。これは，Gregorc[6]のものが使用された。

学生個々の学習スタイルは，学生が各学習スタイルの特徴を表わす語句［注を参照］を４つ指摘することにより，最終的には調査者が決定した。

[調査結果]

1，チペワ族の高校卒業者と退学者の主要学習スタイルは，ともにAR

であった。それぞれ35.7%，43.7%である。

2，非インディアン学生の卒業者と退学者の主要学習スタイルは，ともにCRであった。それぞれ37.2%，41.7%であった。

3，チペワ族の主要学習スタイルであるARの内容は，演繹的全体的教授法と一致する。

4，非インディアン学生の主要学習スタイルであるCR内容は，アメリカの一般的な教授法である帰納的線的教授法と一致する。

5，したがって，チペワ族の学生の主要学習スタイルは，多くの教室で行なわれている教授法と合致しない。この不一致が成功，不成功を決定する要素となる。

著者によると，この研究の限界は，両母集団の卒業者と退学者の主要学習スタイルの間に有意差がなかったことである。また，退学の要因に関する研究ではふつう取り上げられる社会的経済的地位や麻薬乱用などの要因が全くコントロールされていないことも問題として残るであろう。

しかしながら，チペワ族に限ってはいるが，アメリカ・インディアンの特殊な学習スタイルに焦点を当てたということができ，このことは大いに評価されてよい。著者は，インディアン学生を教える教員は，その学習スタイルを理解することにより教授法を考慮するべきであると提言しているが，当然であろう。アメリカ・インディアンの特殊な文化をカリキュラムに反映させる必要があることは，繰り返し主張されてきたが，ここではそれに止まることなく，さらに教授法にまで言及している。

(12) Patrick Brady, "Native Dropouts and Non-Native Dropouts in Canada: Two Solitudes or a Solitude Shared?", Vol.35, No2, Winter 1996.

[研究目的]

「文化的断絶」仮説（前出のLedlowを参照）では，カナダ・インディア

ンの学生（その置かれた状況はアメリカ・インディアンと同様である）の退学の多さを十分に説明できない。この説に変わりうるものを導き出すことが，この研究の目的である。

［調査方法］

過去の調査研究の結果を分析検討することによる。

［調査結果 ― 非インディアンについて］

1，高校卒業生の家族の平均収入は$33,180であり，一方退学者の場合は$27,030である。(Sullivan 1988)

2，退学者の父親はブルー・カラーの仕事に従事している場合が多い。(同)

3，単親家庭の学生の退学率はかなり高い。(Sullivan 1988，Radwanski 1987，Anisef and Johnson 1993)

4，家族の安定性や援助が欠けていることは，学業成績が低くなり，そのことは退学につながりうる。(Anisef and Johnson 1993)

5，退学者は，勉強が嫌いになっており，学業成績よりお金により大きな価値を見い出している。(Radwanski 1987)

6，退学者は，学校環境から疎外されていると感じていることが多い。彼等は学校から無視されていると信じている。(同，Karp 1988)

7，退学者の82%が，少なくとも1科目を落としている。また，30%が（卒業者は7%）小学校か中学校で1年留年している。(Radwanski 1987)

［調査結果 ― インディアンについて，および非インディアンとの関わりで］

1，両親の社会経済的地位が高いインディアン学生は，低い学生と比較して卒業する割合が高い（それぞれ70%，30%）。非インディアン学生の場合も，社会経済的地位の重要性は同じである。(Hull 1990)

2，インディアン学生の退学率は，地域によって大きく異なる。

都会の中心部への接近が容易なインディアン学生ほど学業成績が高い。(同)

3，学校の管理職，教職員，成績の良い同級生との関係について，「危機にある」インディアンと非インディアンの間には強い類似性がある。

彼等はともに学校や同級生から疎外されていると感じている。そして，退学する可能性が高い。(Radwanski 1987, Myles and Mackay 1989, Wilson 1992, Brantlinger 1993, Oakes 1985, Gamoran and Barens 1987)

4，低い社会経済的地位にある父親を持つ学生は，低い「能力別クラス」に在籍する傾向がある。また，逆に，高い社会経済的地位にある父親を持つ学生は，高い「能力別クラス」に在籍する傾向がある。(Radwanski 1987)

5，先住民学生は，自主的にあるいは不本意に，普通ないし基礎クラスに常に「置かれている」[7]。(Myles and Mackay 1989)

6，先住民学生は，低レベルのクラスに無理やり入れられることが多い。理由は，彼等は大学進学のための勉強は無理だと誰もが考えているからである。(Wilson 1992)

このことは非インディアン学生にも当てはまる。

普通ないし基礎レベルのクラスの学生の退学率（それぞれ62%，79%）は，上級クラスの学生の退学率（12%）よりかなり高い。(Radwanski 1987)

7，学校の規則，例えば出席規則などが両親が低社会経済的地位の学生にはより厳しく適用される。(Wilson 1992, Bratlinger 1993)

8，上級クラスの教員はより熱心である。(Oakes 1985, Gamoran and Barens 1987)

9，教員はインディアン学生とほとんど接触しなかった。(Wilson 1992)

10，退学者の63%が，できる学生は他の学生を見下すと感じている。(Karp 1988)

11，インディアン学生は人種差別発言に耐え，また，学校は彼等がいるべき場所ではないと感じている。(Wilson 1992)

12，学校の機能は，上層階級の考え方によって決定される。学校は，階級間の溝を埋めることができない。(Bratlinger 1993)

13，学校における成功，不成功は，個人的な特質の結果ではなく，社会における社会的経済的機構の反映である。(Wilson 1992)

14，マイノリティの地位は数字上の地位と同義ではなく，むしろ，集団間の力関係の質と関係がある。(Ogbu 1983)

このBradyの研究は，Ledlow（前出）の「文化的断絶仮説批判」をさらに進めたものである。これまでの文献を検討することにより，文化的断絶仮説ではインディアン学生の中途退学が多いことを十分に説明できず，むしろ，それは学生の両親の社会的経済的地位の低さが原因である，と結論づけている。このことはインディアン以外のマイノリティ学生の場合にも当てはまり，中等教育システムの目的は彼等の教育機会を増加させることでもあるということを認識しない限り，彼等の退学率を減らせる見込みはほとんどないとしている。　（未　完）

注および参考文献

（1）原文では“stayers”となっている。前稿で紹介したDavid Eberhardの項を参照。

（2）原文では，“floating”となっている。

（3）原文では，“persisters”となっている。“stayers”と同義と考えられ，訳語をともに「滞学者」とした。

（4）原文では，“medicine man”である。一般的には「呪術医」ないし「まじない師」という訳語が当てられるが，誤解の恐れもあるので，あえて「メディシン・マン」とした。メディシン・マンは霊的能力を獲得する力を備えている。いかなる場合も，その力を他の人々の幸福のために用いる。時には，大きな儀式で僧侶の役割を果たすこともあった。なかには，医者の仕事をするメディシン・マンもいた。

（5）伊藤　聰「アボリジニと教育II　――　その教育を阻害する諸要因について　――　」『オーストラリア研究紀要』第18号，追手門学院大学オーストラリア研究所，1992年12月，114－115ページ。

（6）A. F. Gregorc, *Gregorc Style Delineator-Research Edition*, Columbia, CT:Gregorc Associates, Inc.,1982.

各学習スタイルの特徴は次のとうりである。

Concrete Sequential: orderly, step-by-step, structured, practical, accurate, factual, according to standards, directions-oriented, organized, hands-on, reliable, detailed, particular, and exact.

Abstract Sequential: logical, academic, structured, intellectual, a reader, a researcher, theoretical, evaluative, analytical, value judge, thinker, debater, and studious.

Abstract Random: sensitivity, emotion, personalization, imagination, interpretation, holistic view, aesthetic appreciation, part of a social group, discussion, reflection upon feelings, flexibility, and adaptability.

Concrete Random: independence, creativity, calculated risk-taking, varied and unusual approaches, variety of options, experimenter, inventor, problem-solver, investigator, intuition, agent of change.

（7）原文は，"placed"と引用符付きとなっている。「教師によって一方的に」という感じである。